

第2章 障害のある人への理解教育のためのカリキュラム

2-1 中学生を対象としたカリキュラム

- 《指導方針》
- まちに暮らしている人を調べ、障害のある人も同じまちで暮らしていることを知る。
 - 障害のある人の暮らしや働いている場所を見学し、障害のある人のための施設・設備や暮らしの工夫を知る。
 - 見学や交流をとおして、障害という個性を理解する。
 - 擬似体験をすることによって、それぞれの障害を理解し、自分の生活の姿勢や態度を見直してみる。
 - こころのバリアフリーという観点から、考えられるまちづくりの構想化を行う。
 - すべての人たちに対する思いやりの気持ちを育てる。

時数	指導内容	展開例	留意事項
1	まちの現状調査① ・グループ活動 ・情報収集の実践	(屋外を中心に) 点字ブロック、信号の音、盲導犬、マーク、公共交通機関など、障害のある人のための設備を見つける。	障害のある人のための施設・設備を見つけることとおして、まちのなかで暮らしていくための工夫を考えさせる。
2	まちの現状調査② 「障害のある人のための施設・設備をさがそう」	(屋内を中心に) ・エレベーター、エスカレーター、トイレ、スロープ、点字など。 ・障害のある人のための施設を一覧表にまとめる。(屋外・屋内)	このような施設・設備をとおして、健常者と同じように暮らしていくための工夫を考えさせ、これまでの体験について感想を書かせる。
3	調査結果レポート作成 ・考察をグループ毎に行いレポートにまとめる。 ・グループ内で情報交換	・各自考察を深めレポートを作成する。 ・現状の把握と認識。	レポート作成の際、グループ内での考察を深める。
4	地域の福祉の歴史と現状	地域のソーシャルワーカーの方を招き、地域の福祉の歴史と現状と今後の展望をつかむ。	お話を伺った後、グループディスカッションを行う。今できる社会貢献について考察させる。
5	福祉の環境、地域の様子 (NIE学習)	新聞や市報などを利用し障害のある人のための施設や設備の設置状況や、催し物などを調べ、積極的な参加を促す。	定期的に新聞や市報を活用し市政などにも関心を持たせる。
6	だれもが住みよいまちにするには① (ICT学習)	インターネットを利用し、福祉の現状をつかみ、もっと改善できる点、行政や市民は何ができるのかを考える。	地域や社会福祉協議会などのホームページを活用させる。

時数	指導内容	展開例	留意事項
7	だれもが住みよいまちにするには② (講演) 講演例 自閉症協会の方の講演	・関係者より障害のある人の生活や就労支援、実際にあったトラブルなど、お話を伺う。 ・自閉症協会の方の話を伺い支援の現状をつかむ。	知的障害、精神障害の方の生活を知り、精神・知的障害の方々への支援のあり方を考察させる。
8	職場・施設・暮らしの理解① 「活躍している障害のある人たち」	新聞・雑誌などのメディアを使って障害のある人たちが活躍している活動を知る。(パラリンピック、芸術家、政治家 他)	障害を乗り越えて活躍する姿をとおして、心の強さに気づかせる。
9	職場・施設・暮らしの理解② 「活躍している障害のある人たち」	図書館を活用し障害のある方の自伝などを読む。	障害を乗り越えて活躍する姿をとおして、自己啓発に結び付けさせる。
10	高齢者を知る① 高齢者の日常生活について知る	高齢者の暮らしぶりや御苦労などを調査し、日本の高齢化社会の現状を認識する。	高齢者の方も町のなかで生活することに苦労が多いことを気づかせる。
11	高齢者を知る② 高齢者の日常生活について知る	日本の高齢化社会の未来の展望を考察させ、今できることについてプレゼンを行なう。	
12	高齢者を知る③ 高齢者の日常生活について知る	老人介護施設の方からお話を伺い、老人介護の実際を知る。	実体験をとおし老人介護の基本を知り老人介護に興味・関心を持たせる。
13	視覚障害① 「さわって、聴いて」	・目を閉じたまま触れたり、音を聴き実体を考える。 ・アイマスクを着用し、物を取りに行ったり、太鼓をたたいてみる。 ・伝達手段である点字に実際に触れてみる。 ・杖を使って校舎内や校外を歩いてみる。	何を頼りにして(触覚・聴覚・臭覚)生活しているのかを気づかせる。また、視覚障害のある人は、設備がわかりやすく、安全でなければならぬことを気づかせる。
14	視覚障害② 「私たちができること」	・視覚障害のある人と一緒に走るときの伴走方法や、実際にまちで白い杖を持った方を見かけたときの介助方法などのビデオを見せて、自分たちに何ができるのかを考える。 ・バスや電車内などでの介助方法について学習する。	町で視覚障害の人を見かけた際、声をかけ、介助することができるように支援の仕方に気づかせる。

時数	指導内容	展開例	留意事項
15	聴覚障害① 「伝達ということを考えよう」	・ヘッドホンをしている友だちに対して、ある言葉や気持ち伝えるためには、どのように表現すべきかを考える。	口形や表現を大きく明確にし、ジェスチャーを入れることも大切であることを知らせる。
16	聴覚障害② 「補聴器をしている人」 「手話体験」	・補聴器という器具を知る。 ・簡単な手話を学ぶ。	聴覚障害のある人と接するときの注意すべき点を考えさせ、支援の仕方を知る。
17	肢体不自由① 「車いす体験」	・班に分かれて、車いすに乗って校舎内外を回ってみる。 ・お互いに車いすの介助と車いす体験をする。	気づいたことを詳しくメモにとり、次時に生かす。
18	肢体不自由② 「体験をもとにした話し合い」	・どんなところが不自由と感じたのか、恐怖感はなかったのかなどを発表し合う。 ・支援の仕方やバリアフリー化のことを考える。	歩行困難な場合だけでなく、上肢の障害などについても考える。
19	知的障害① 「ビデオ視聴」 僕とバディと	・ワークシートを記述し、自己の考えをまとめる。 ・こころのバリアフリーについて考える。	障害は身体だけでないことをわからせる。知的障害のマイナス部分だけを追うことのないようにする。
20	知的障害② 「ビデオ視聴」 僕とバディと	・ワークシートの内容を発表し、ディスカッションを行う。 ・今の自分たちに何ができるか考察する。	各自の障害者に対する考え方の変化を把握させると共に、共生に対する意識を向上させる。
21	ディスカッション① ・こころのバリアフリーとは ・理想のこころのバリアフリーとは ・理想のまちづくり	・グループディスカッションにおいてそれぞれの意見交換を行う。 ・次回の調査に向けての準備をする。 ・オブザーバーとして地域の有識者に参加していただく。	意見の出やすいグループ編成によって行っていく。
22	ディスカッション② ・グループディスカッションと全体ディスカッションを織り交ぜて	・各地域の現状調査から不足な点や今後の課題について、検討する。 ・障害の種別によってそれぞれの立場で考える。	いろいろな視点で探ってみる。

時数	指導内容	展開例	留意事項
23	教室ディベート① 準備 『障害のある人と共にまちで暮らす』	・ディベートのルールをつかむ。 ・インターネット、図書館などで次回のディベートの資料作成およびグループミーティングを行う。	ディベートのルールを認識させ、次時に行われるディベートで自分の主張する立場に立った資料集めを行わせる。
24	教室ディベート② 『障害のある人と共にまちで暮らす』	・ディベートの資料を賛成派と反対派に渡す。 ・資料の活用方法およびディベートの展開を学ぶ。 ・ディベートを体験する。	自分の持っている意見だけでなく、他の考え方にも目を向けさせるようにする。
25	ボランティアとは	社会福祉協議会の方を招きボランティアの概念および、地域のボランティアの現状をつかむ。	ボランティアに対する基本姿勢などを把握させ意欲を引き出す。
26	「中学生こころの作文コンクール」の受賞作品にふれる	・受賞作品集を活用する。 ・心に残った作文を1点選んでもらい、どの点に感銘を受けたかまとめると共にプレゼンする。	自ら作文を書きたいといった意欲を向上させられるよう授業を展開する。
27	「障害」に代わる言葉について考える	例文を紹介し各グループにてディスカッションさせる。	さまざまな視点で考察できるように資料を提供する。
28	こころの作文コンクールの5つのテーマからひとつ選び作文する	感銘を受けた受賞作品を例文として自己の考えをまとめる。	文字数など気にせず各自のペースで作文させる。
29	まとめ① 共生をテーマとした新聞作りを行う	・新聞の名前を決める。 ・新聞の構成を考える。 ・見出しを考え内容の肉づけを行う。	やらされているのではなくやりたいといった気持ちを芽生えさせる工夫を行う。
30	まとめ② 研究発表会	これまでをとおして学んだこと、発見したこと、福祉行政などについて、学年の研究発表会を設け、グループ毎で発表を行う。	これまでの学習・体験を再確認させると共に友人の感じ方なども吸収させる。また、自分にできることを探る。